

武蔵野のかけら

筆者はよく自転車に乗って武蔵野のかけらを探しに行く。それはケヤキの大木だったり、雑木林の名残りだったり、宅地に囲まれた畑だったりする。それらを「かけら」と呼ぶのは武蔵野の大部分が東京に呑み込まれ、あらかた姿を消してしまったからだ。

「武蔵野はめまぐるしく変貌する（略）それだけにまた、古い武蔵野の面影を伝えるものは、路傍の石地藏にしても、風除けの樹木に囲まれた藁屋根にしても、よけい心ひかれるのである」（「武蔵野をたずねて」）

と、天沼に住んでいた作家・上林暁が書いたのはいまから60年前のことだが、上林が懐かしみ、国木田独歩が愛した雑木林の武蔵野も見方を変えれば「変貌」する「貌」の一つだったといえるかもしれない。

なぜなら、中世までの武蔵野台地は見渡す限りススキやカヤの原だったが、江戸時代に入って入植した人々が火山灰に覆われた不毛の大地にクヌギやコナラを

植えて落葉樹の林を育て、落ち葉を集めて堆肥をつくり、繰り返し畑に撒いて土壌を改良し、緑の武蔵野を作り上げたからである。

「青葉の頃其林中に入りて見よ。葉々日を帯びて、緑玉、碧玉、頭上に蓋を綴れば、吾面も青く、もし仮睡（うたたね）せば夢又緑ならむ」（『自然と人生』）。

明治の終わりに武蔵野に移り住み、自ら農耕を行った徳富蘆花の言葉だが、青葉の季節、皆さんも身近な武蔵野のかけらを見つけ、緑の夢を見てはいかがでしょうか。

「荻窪の記憶」プロジェクト 松井和男



早春の畑と屋敷林(上高井戸)



新緑の蘆花恒春園